Helmut Koopmann: Thomas Mann – Heinrich Mann. Die ungleichen Brüder.

Verlag C. H. Beck, München 2005.

村　上　公　子

改めて言うまでもないことながら，ドイツおよびドイツ語圏の人たち（以下，煩わしいので「ドイツ」，「ドイツ人」と表記する）にとって「ドイツ文学」の持つ意味は，日本人にとってのそれとは異なる。そして当然「ドイツ文学」を作り上げてきた，ないし作り上げている作家たちに対してドイツ社会が持つ興味もまた，日本社会とは質量ともに違う。

トーマス・マンとその家族（というか，むしろ「一族」という言葉の方がふさわしくも思えるが）に対するドイツ人の興味は，多少の波と質の変化がありはするものの，作家の存命中以来現在まで，途切れることなく続いている。殊に，von der Lühe たちの努力によって，トーマス・マンの長女エリカ，長男クラウスの生涯とその作品に改めて焦点が当てられて以来，トーマス・マンとその家族については，評伝，作品，書簡等の書籍の出版，各種の展示が行われ，さらにはラジオ，TV を含むマス・メディアでも，繰り返し大きく取り上げられてきた。これら一般社会における興味がどちらかと言うと「人間的」側面に集中し，親子や夫婦関係であるとか，隠蔽されたり露出されたりした同性愛であるとか，兄弟姉妹間の愛情と相克などのゴシップに傾きがちであることは，恐らくやむを得ない。

ところで，「トーマス・マンとその家族」と言うと，通常どの世代を指すだろうか。人によるとは思うが，筆者個人は，トーマス・マン本人とその配偶者，そしてその子供たち，つまりトーマス・マン以下の世代を想定し，かつ横（つまりトーマス・マンの兄弟姉妹）の次元は考えない，ないし二次的にのみ考える。上で「一族」という方がふさわしい，と述べたのは，一族であれば，横の次元も上の世代も問題なく含まれると感じるからである。かなりの年齢まで生き，何よりも，それぞれが結婚して家庭を持ってしまうと，兄弟姉妹は互いに「家族」とは呼ばれにくくなる。トーマス・マンについても事情は変わらない。しかし，この偉大なドイツの作家には，もしかすると同じくらい偉大なドイツの作家であると評価されていた兄がいた。そして，ハインリヒとトーマスのマン兄弟が作家としても，政治的にも，そして私生活のあり方においても，互いに立場を異にし，少なからず対立関係にあったことは，公然たる事実だった。

したがって，トーマス・マンの書簡や日記が研究者・読者に資料として留保なく公開されるようになる以前から，「マン兄弟の相克」については論じられていたし，トーマス・マンの評伝においても，ハインリヒ・マンの伝記でも，ライヴァルとしての二人の「兄弟関係」は従来から主要なテーマの一つになっている。

ごく乱暴にまとめてしまえば，トーマス・マンとハインリヒ・マン二人の兄弟相克関係

は，トーマス・マンとその一族をめぐる問題の中でも，最も古くから注目され，論じられてきた，重要なテーマである。従来それは，第一次世界大戦に対する姿勢の相違に代表される，「左翼に同情的なハインリヒ」と「保守的価値にこだわるトーマス」の政治的立場の違いとして捉えられたり，主にトーマスの側からの攻撃に基いて，文学的な資質の違いからくる芸術上の対立と考えられていた。

それに対して，最近の研究ではむしろ，幼い時代からの「兄弟相克」関係に注目が集まり，二人の対立に関する心理学的，ないし家族社会学的な解釈を「証明」する「証拠品」として，トーマスやハインリヒの作品が用いられていることも少なくない。

さて，ここで取り上げるコープマンの著書は，著者コープマンのドイツ文学研究者としての良心と良識に基き，トーマス・マンとハインリヒ・マンそれぞれの作品にのみ語らせ，それ以外の領域については非常に禁欲的であることを自らに課した論考である。しかしそれは同時に「読み手」，「解釈者」コープマンの並々ならぬ自信を示すものでもある。敢えて細かい家庭の事情などを穿り返したり，心理学的な解釈に頼ったりせずとも，トーマス・マンとハインリヒ・マンの作品を読みさえすれば，二人の関係は全部そこに書いてある，ということなのだから。すなわち：

> 作品に残る兄弟相互の依存ぶりや繋がりぶりは言わん方なく強烈で，作品の背後に兄，ないし弟の姿を想定しないと，訳がわからなくなってしまうものも少なくない。(S.13)

のである。コープマンには二人の評伝を書くつもりはない，トーマス・マンについては一連の，そしてハインリヒ・マンに関しても何冊か，すばらしい評伝が既に出版されているし，何より伝記というものは：

> 普通なによりも生を中心に据えるものであって，作品主体というわけではない。しかし，二人の作品がなかったとしたら，マン兄弟の生がそれほど我々の興味を惹くだろうか？(S.14)

というのである。

この最後の質問は，恐らく修辞的疑問文として置かれているのだろうが，この問いに対して全ての人が一瞬の逡巡もなく「否」と答えるはずだという前提に立って物が言えるのは，コープマンがいわば骨の髄からドイツのドイツ文学研究者であることを示している。

日本の，ドイツ文学研究者と言えるか言えないか自分でもはっきりしない人間としては，このコープマンの問いにどう答えるべきか，かなり長い間考え込み，しかし論理的に考えて，この質問に対しては結局のところ「否」と答えるしかないなあ，という結論にたどりついた。筆者の迷った理由は，自分自身が元はと言えばトーマス・マンやハインリヒ・マンの作品に格別な興味を持っていたわけではなく，むしろ「トーマス・マンとその家族」

の一員の存在に興味を惹かれ，そこからトーマス・マンとその一族の構成する事実と創作の一大ネットワークに近づいた，というところにある。

つまり，作品を知らぬまま作家の「生」に興味を持つことだってあるのではないか，という疑問が残るのだ。しかしこれも，では何故その作家の存在に気づいたのか？と問われれば，それは何らかの媒体によってその知識を得たから，であり，ではその媒体にその作家の存在が認識されるようになったのは何故か，と考えれば，その作家が注目に値する作品を書いたと，いずれかの時点で，何らかの存在によって評価されたからに違いない。従って結局，究極的には作品が問題なのだという結論に達さざるを得ないのである。

まあ，そのような，休むに似た筆者の感懐はともかく，コープマンがここで展開しているのは，一言でいうと，作品による兄弟の対話の軌跡である。ほぼ500ページにわたり，トーマス・マンの最初期の作品，殆ど習作としか言えないような作品から，人生の終わり近く，老大家として完成させた大作に至るまでが登場するが，コープマンによれば，それらはすべて，兄ハインリヒ・マンならびにその著作に対する「反応」として成立した，とまでは言い切れないとしても，「反応」の部分を間違いなく有している。さらに，実は，若きトーマス・マンはその「反応」の積み重ねによって，芸術家としての自己形成を果たしていったのだ，という主張が悠然と，かつ緻密に展開される。

もちろん，この「反応」は一方通行だったわけではなく，兄ハインリヒの作品，あるいは私信，行動からも，トーマスの作品に対する反応が取り出され，示されている。そもそも相手から全く無視されていては，「反応」を繰り返すこともできないはずで，当然そこには「相互」反応があったのだ。

しかし，この相互反応は決して五分五分で釣り合っているものではなかった。

> トーマス・マンは兄を必要としていた。兄とは違うと対立することで，自分自身のあり方を定めるために。(S.12, passim)

そしてコープマンによれば，トーマスの側からのこの「反応」が作品として現れる最初の典型例が，ハインリヒの家族小説『ある家庭にて（„In einer Familie“）』に対する『ブデンブローク家の人々（„Buddenbrooks“）』であるという。ハインリヒの作品が家族の危機を描くようで結局平和な家庭の復旧に終わる，わざとらしさを否定しきれないものであるのに対して，ある家族の容赦ない没落と崩壊を描く，トーマスのこの処女長編小説が傑作であることには贅言を要しない。

ハインリヒがやったことを，ハインリヒよりははるかに慎重に，技巧を凝らして心理の綾を描き込み，複雑な構成にして，もっとうまくやって見せる。これがトーマスの「反応」の一つのパターンである，とコープマンは言い，上記以外の例として，ハインリヒの『のらくら者の国（„Schlaraffenland“）』に対するトーマスの『マーヤー（„Maja“）』および『フェーリクス・クルル（„Felix Krull“）』の計画を上げる。言うまでもなく，『マーヤー』は未完に終わるし，『フェーリクス・クルル』が完成するのは『のらくら者の国』の50年

近く後である。この極端なほどの制作速度の違いも，兄弟間の緊張関係を（トーマスから見て）厳しくする要因の一つであった。

『ブデンブローク家の人々』の成功，そしてカティア・プリングスハイムとの結婚により，「代表・体現者」としての自らの能力に一定の自信と裏付けを得たにもかかわらず，トーマスは『愛の狩（„Die Jagd nach Liebe“）』，『女神たち（„Die Göttinnen“）』，『ウンラート先生（„Professor Unrat“）』と次々に長編小説を生み出すハインリヒに脅威を感じざるを得ない。それが1903年12月のハインリヒ宛書簡に示された，兄を打倒する意図を持って，憎悪を籠めて攻撃する，という「反応」に繋がる。

> …こうしてトーマス・マンは，生まれを同じくするという二人の間の架け橋を棄却し，兄弟ならばこその共通性をにべもなく否定した。そして，この書簡の背後にも再び，託宣のごときかの宣言「君のようにはなりたくないと思ったから，僕は今の僕になったんだ」が姿を現す。(S.144)

ハインリヒは弟の攻撃に対して，努めて穏やかに「兄弟」が共有する過去や背景を指摘し，自分の側からの好意と愛情を強調して，なるべく事を穏便に済ませようとする。

この書簡にせよ，その後，結局長期にわたる絶交に至った，ハインリヒの『ゾラ論』の前後に書かれたトーマスのエッセイにせよ，率直に言ってトーマス・マンの言っていることは無茶苦茶だ，という印象を持っていたが，コープマンの要を得た解釈に従って再読し，やはり無茶苦茶だという印象を強くした。兄弟喧嘩をして，自分はとても敵わない兄のことを「お兄ちゃんが虐めるんだ。お兄ちゃんが僕に意地悪をするんだ」と泣きわめいて駄々をこねている弟，という風情である。

しかし，何より驚くべきは，トーマス・マンの駄々のこねかたの見事さかもしれない。『非政治的人間の省察（„Betrachtungen eines Unpolitischen“）』はコープマンによれば全編これハインリヒ攻撃のために書かれたものであるが，「理屈は何にでもつく」ことを，文筆家としての能力の限りを尽くして証明しているような作品である。家族から見ても執筆に苦しんでいたそうだが，そのようなものを書き続けてしまえる能力，というか執念深さは比類ないものだし，その能力と，小説の作品世界を緻密に構成する能力は通底するのかもしれない。

これ以降，弟からの憎悪を籠めた「反応」は見えなくなる。のみならず，兄弟相互の反応は，表面上の和解と協調の裏で，作品の行間に埋もれて見えにくくなり，その状態はヴァイマル共和国崩壊の後，兄弟がまずヨーロッパで，そして（ハインリヒにとっては）最終的にアメリカ合衆国で亡命生活を送るようになっても，見かけ上は変わらない。

だが，周知の通り，合衆国における二人の社会的地位には圧倒的な格差が生じていた。トーマス・マンが富裕で有力なパトロンの庇護もあって，„the greatest living man of letters“としてもてはやされ，「私がいるところにドイツ文化はある（„wo ich bin, ist die deutsche Kultur“）」と嘯いていられたのに対して，ほとんど着の身着のままでニューヨークにたど

り着いたハインリヒは，お情けで与えられたハリウッドでの（役にも立たない）脚本書きの仕事で生活を支え，それが打ち切られた後には，ほぼ無収入の状態に陥り，一言でいうと，惨めな存在と化していた。

成功した弟にとって，兄はいまや胡散臭い上にアル中の妻と別れようともせず，何かというと金をせびる「問題のハインリヒ」となったのである。そして，出版の当てもなく書かれていた兄の最後の作品を，弟は全く理解できなかった。

ハインリヒの遺作『息（„Der Atem“）』は，トーマス・マンならずともなかなか理解するのが難しい作品のようである。筆者もかつて読んでみようとして，まるで訳が分からなかった。しかし，コープマンがこの作品の主人公の遺言を，ハインリヒのトーマスに宛てた言葉として示してくれている部分を見ると，とてもよく分かり，ほとんど感動的である：

> これは，自己対話として描かれた，生の縁辺におけるある対話であるが，もはやこのようにしてしか弟は引き合いに出せなくなってしまっていたのだ。…「私があなたのような野心を持たなかったから，私たちは縁が切れた。あなたの生涯は戦いの連続だった…あなたから見れば私はいい加減な人間だったのでしょう。ただ，それでも，あなたのことを分かっていたのは私だけだった…（S.450）

まあ，一見殊勝そうなこの言葉の裏に，兄の誇りを賭けた皮肉が隠れている，という分析もあるのだが，世に忘れられた存在として死にいくことを自覚したハインリヒが，その死を受け入れて執筆したのがこの作品だというコープマンの解釈には，説得力がある。

しかし，作品解釈として最も見事なのは，トーマス・マンの『フェーリクス・クルル』を分析した章「のらくら者の国のフェーリクス・クルル。生が死に勝利する（„Felix Krull im Schlaraffenland. Das Leben siegt über den Tod“）」であろう。先に触れたように，この作品はハインリヒの『のらくら者の国』に対するトーマスの「反応」の結実とされている。しかし，コープマンはここで，トーマス・マンが1905年「詐欺師小説」の着想から，主人公の誕生年の変更（ハインリヒの1871年から自分の1875年に）を経て，1910年代以降断片的に出版しながら中断，合衆国への亡命後，この作品を改めて取り上げて完成させるまでを丁寧に追っている。最終的に完成した『フェーリクス・クルル』は，ハインリヒの最後の作品群が死の色濃いものであるのに対して，素晴らしい生の賛歌なのだそうだ：

> …しかし，ここでは生が死に対して立ち上がる。トーマス・マンの日記には，死の観想が繰り返し登場していたかもしれないが，この小説では，死は見事に打ち負かされている。…ここで祝われているのは生である。まさにそれが儚いものであればこそ…（S.483）

こうして見てくると，正直のところ気が重くなる。なぜなら，結局，「兄」を追い落として自分が天下を取るのだ，と心に決め，憎悪も露わに，あらゆる機会を捕えてその実現

に勤しんだ弟が成功者として人生の最後に生を賛美し，「まあ兄弟なのだから」と穏やかにことを納めるべく，兄弟愛に拘っていた兄は弟に無視されたまま一人「死」と向き合い，受け入れて死んでいった，ことになるからである。

コープマンが筆者のこのような読み方と感想を是とするかは分からない。ドイツの人たちが本書をどのように読んだのか，興味のあるところである。論の進め方，注の付け方などから判断して，これは明らかに学術書ではなく，一般の読者を対象に書かれたと考えられるが，率直に言って，本書に示された作品による兄弟の対話を，全く自由に楽しめる読者がドイツにどれほど存在するのか，少々疑問を感じもする。トーマス・マンの作品ならば，問題なく読んでいる人は少なくないだろうが，ハインリヒ・マンの作品となると，本書に登場する全作品既読である読み手は，それほど多くもないのではなかろうか。

しかし，それもコープマンのねらいだったと考えることもできる。最初に述べているとおり，何よりも「作品」が問題なのだから，自著を介してハインリヒ・マンの作品に取り組もうとする人が増えるとすれば，それはコープマンを喜ばせこそすれ，決してがっかりさせることではないだろう。